



第30回 奥州胆沢劇場

大堤祈りの松

妻子を失った悲しみから出家し、胆沢の地にたどり着いた主人公・文覚。文覚は村人と一緒に助け合いながら暮らしていたが、数十年に一度の大雨によって大堤が決壊の危機を迎える。頑丈な大堤を造るため、若い娘を人柱に立てることが話し合われる。

胆沢の土地を守るために、最愛の子を差し出さなくてはならない家族、生き抜くために葛藤する住民の複雑な感情を描いた。

1 寄り合いで人柱を立てなければならなくなったことを娘・おゆきに聞かれてしまい苦悩する与平 2 大堤落成のシーンでは郷土芸能団体が神楽を披露 3 第1回公演と同じ題材を新たに脚色。自責の念に駆られる文覚にスポットを当てた 4 観客から好評だったバック絵は美術スタッフの力作

～手作りの舞台に拍手喝采～

笑いあり涙あり 感動の市民劇

市内3つの市民劇(奥州前沢劇場・奥州胆沢劇場・奥州◇市民劇)が上演されました。どの舞台も市民による完成度の高い作品。来場者からの出演者やスタッフに対する拍手は、いつまでも鳴り止みませんでした。

奥州前沢劇場

「人間万歳 遠藤梧逸翁物語」は、2月16日、前沢ふれあいセンターで上演されました。午前と午後、2回の公演に集まったのは延べ940人。来場者は、それぞれの場面での梧逸の俳句にうなずいていました。

奥州胆沢劇場

「大堤祈りの松」は、2月22日・23日の両日、胆沢文化創造センターで上演されました。2日間で計3回の公演に集まったのは延べ1600人。胆沢の地を守るための苦悩を描いた感動の舞台に、多くの来場者が涙を流しました。

奥州◇市民劇

胆沢出身の教員、文学者の織田秀雄の生涯を描いた「ヤロコ」の詩、織田秀雄と児童たちは、3月1日・2日の両日、市文化会館で上演。計3回の公演に延べ1500人が会場に詰め掛けました。秀雄のまっすぐな姿は、来場者の心を打ちました。



奥州◇市民劇

ヤロコの詩

織田秀雄と児童たち

胆沢出身の教員、文学者であった織田秀雄。秀雄は、教え子からも同僚からも慕われた教員である傍ら、方言詩や童話などの文才を教育運動や農民芸術運動にも発揮した。しかし、その一連の活動が、治安維持法に抵触し失職。その後も無実の罪で投獄されながらも、釈放後には創作活動を続けた。石川啄木、宮沢賢治と並び、「岩手の3大文学者」と評されながらも、時代の波に翻弄され、早世した知られざる人物像に迫った物語。

1 秀雄の授業は面白く、子どもたちはいつも笑顔 2 秀雄の自由な教育活動が、いつしか警察の耳に入り、自宅に家宅捜索が入る 3 教員をやめ、自由な執筆活動をするために上京したいと恩師に告げる秀雄 4 小学校時代の教え子は、胆沢病院の前で、秀雄の死を嘆き悲しんだ

人間万歳

第14回 奥州前沢劇場

前沢出身の俳人・遠藤梧逸(本名:遠藤後一)の生涯にスポットを当てた作品。代用教員時代の教え子・良夫が、梧逸の思い出を語るところから始まる。梧逸は、勉学に励み、東京帝国大学(現在の東京大学)を出て、国の逓信省に就職。戦前・戦中の日本の電信電話や鉄道の普及に大いに貢献した。教員時代や逓信省時代のエピソード、娘や妻との別れのシーンなどを通し、「人間の幸せ」について、梧逸が詠んだ俳句と共に描いた。

1 昭和39年、梧逸が作詞した校歌を歌う白鳥小学校の子どもたち 2 劇中、場面が展開することに梧逸が詠んだ俳句10句を紹介した 3 割烹南部屋(前沢区)で行われた俳句会の様子 4 俳句上達のためには「続けることが大事だ」と語る梧逸

